

# 主要部内在型関係節の構造－方言研究からの一考察\*

吉村紀子

## 1. はじめに

日本語には面白い関係節がある。通例、「主要部内在型関係節」(以下、内在節と略表記することにする)<sup>1</sup>と呼ばれている構文で、例えば(1)において、「りんごが皿の上にあったの」(1a)、「泥棒が銀行から出て来たの」(1b)がそれである。

- (1) a. 太郎がりんごが皿の上にあったのを食べた。
- b. 警官が泥棒がコンビニから逃げ出してきたのを逮捕した。

問題の関係節を「主要部内在型」と称する理由は、この構文が次のような2つの特徴を持っているからである。第一に、内在節の主要部に形態素「の」が現れるという統語上の特徴がある。第二に、その形態素「の」が意味的に内在節内の名詞に相当するという解釈上の特徴があげられる。例文(1)の場合、「の」は内在節の主語の位置にある「りんご」「泥棒」を意味する。つまり、それらは内在節の主語の位置に生じているにもかかわらず、主節動詞「食べた」「逮捕した」の目的語の役割を担っている。この点は、「の」に格助詞「を」が付与され、(1)が(2)<sup>2</sup>と同じような意味を持つことから理解できる。

- (2) a. 太郎が皿の上にあたりんごを食べた。
- b. 警官がコンビニから逃げ出してきた泥棒を逮捕した。

これらの2つの特徴に焦点を置き、内在節の構造について生成文法の観点から考察しようとする研究は、黒田による一連の論文(1974, 1975/76, 1976/77)<sup>3</sup>以降から本格的に始まった。これまでの研究を概観してみると、解決しなければならない問題は次の2点に絞られている。第一の問題点は、内在節の主要部が名詞(N)であるのか、それとも補文標識(C)であるのか、という「の」

の範疇に関する点にある。第二の問題点は、内在節が主節において項 (argument) であるのか、それとも付加詞 (adjunct) であるのか、という句構造上の課題にある。つまり、これらの問題点をわかりやすく図式にまとめると、次のようになる。

(3) [ <sub>内在節 = Argument or Adjunct</sub> [... NP...] [ <sub>N or C</sub> の ] ]

(3) について、例えば、黒田 (1992, 1998, 1999a)<sup>4</sup> の提案では、「の」が通常の名詞に置換できないことや尊敬語といっしょに用いることができないことから、それは名詞化補文標識 (nominalizing COMP) であり、したがって内在節はCPであると分析し、それは主節において項となりうるとしている。他方、村杉 (1992, 1994, 1996) や三原 (1994) の考察では、主節動詞によって内在節に格が付与されることやそれがテータ位置に生起することから、「の」は名詞化名詞 (nominalizing N) であり、したがって内在節は複合名詞句となり、副詞節の機能を果たすものであると主張している。<sup>5</sup>

本稿の目的は、第一に、(3) に示した内在節の2つの問題点について、2種類の異なる「の」を用いる方言<sup>6</sup>を調べることによって何が言えるかを考察することにある。第二に、シンタクスの問題に対して方言研究から記述的に検証していくという新しい研究方法を例示することにある。<sup>7</sup>

## 2. 八代方言の事実：吉村 (2001)

吉村 (2001) は、熊本県の八代地方で話されている八代方言では、問題の「の」が「の」ではなく、2種類の異なる形態音韻素を範疇的に区別して用いることを報告している。内在節の議論に入る前に、吉村の分析について要点を振り返っておこう。

### 2.1 「つ」

吉村 (2001) では、第一の考察点として、標準語では「の」を用いるのに対して、八代方言では「つ」を用いることが観察されている。

標準語	八代方言 <sup>8</sup>
(4) a. 赤いりんご／ <u>の</u> を食べた。	赤かりんご／ <u>つ</u> ／* <u>の</u> は食べた。

‘(I) ate a red apple/one.’

- b. この辞書は一郎のだ。      こん辞書は一郎のつ／\*のばい。

‘This dictionary is Taroo’s.’

- c. 東京からのを待っていた。      東京からのつ／\*のば待った。

‘(They) were waiting for the one from Tokyo.’

(4) の例から、英語の ‘one’ に相当する名詞の「の」は、八代方言では「の」ではなく、「つ」であることがわかる。

同様に、この方言では、「の－関係節」の「の」に対しても「つ」を用いることが例示された。<sup>9,10</sup>

- (5) a. 太郎の皿ん上んあったつ／\*のば食べらした。

(太郎は皿の上にあったのを食べた。)

- b. そん子のおじさんのこうて来らしたつ／\*のば着た。

(その子供はおじさんが買って来たのを着た。)

また、「こと」に相当する「の」も「つ」であり、「の」を用いないことがわかった。

- (6) a. 東京の物価の高かつ／\*のは有名ばい。

(東京の物価が高いの／ことは有名だ。)

- b. 景気の悪るなつ／\*のはほんなこつばい。

(景気が悪くなつ／ことは本当だ。)

## 2.2 「と」

他方、空演算子の移動によって生じる分裂文の場合、八代方言では「の」ではなく「と」が用いられることが観察された。<sup>11</sup>

- (7) a. 太郎のデニーズで食わしたと／\*のは寿司ばばい。

(太郎がデニーズで食べたのは寿司をだ。)

- b. 花子の昨日手紙ば出さしたと／\*のはアメリカの友達にばい。

(花子が昨日手紙を出したのはアメリカの友達にだ。)

吉村の分析に従うと、この場合、「と」は補文標識である。すなわち、標準語においてと同様に、八代方言でも補文標識 (C) には「と」を用いると述べて

いる。

また、吉村は(6)を「と」を用いて書き換えることが可能であるとした。その結果、(8)は、英訳に示すように、(6)と異なり、構文はthat-節を含むものであると考えられた。<sup>12</sup>

- (8) a. 東京の物価の高かとは有名ばい。  
 ‘It is well known that prices in Tokyo are high.’  
 b. 景気の悪るなったとはほんなこつばい。  
 ‘It is true that our economy has got worse.’

以上の考察をまとめると、次のような結論となる。

- (9) 八代方言では、名詞の「の」は「つ」であり、他方、補文標識「の」は「と」である。<sup>13</sup>

### 3. 八代方言からの提案

以下、上記で見た八代方言の事実(9)に鑑みながら、内在節に関する2つの問題点(3)について考察を進めていくことにする。

#### 3.1 内在節はCP

内在節の例文(1)に戻って、その構造を八代方言から探ることから始めよう。(10)は(1)を八代方言に翻訳した文である。

- (1) a. 太郎が [[りんごが皿の上にあった] の] を食べた。  
 b. 警官が [[泥棒がコンビニから逃げ出してきた] の] を逮捕した。  
 (10) a. 太郎の [[りんごん皿ん上んあった] と] ば食べらした。  
 b. 警官の [[泥棒のコンビニから逃げ出してきた] と] ば逮捕さした。

前に述べた通り、解釈上は主要部の「の」が関係節の主語である「りんご」・「泥棒」の役割を担っていて、内在節が主節動詞から目的格(八代方言では「ば」(注8))を受けているように見える。ここで注目すべき点は、(10)にお

いて、主要部の位置に「と」が現れていることである。つまり、八代方言では「と」が補文標識であるという上記の結論に基づくと、(1)の「の」は補文標識の「の」であり、問題の内在節はCPであると分析することができる。

この提案について、さらに検討してみよう。

- (11) a. [<sub>CP</sub> [せんせえの論文ば書かした][<sub>C</sub>と]] ばもう読んだか。  
 ((あなたは) 先生が論文を書いたのをもう読んだの。)
- b. 花子は [<sub>CP</sub> [ばあちゃんの人形ば作らした][<sub>C</sub>と]] に  
 赤か洋服ば着せた。  
 (花子は祖母が人形を作ったのに赤い洋服を着せた。)
- c. 田中さんな [<sub>CP</sub> [子供ん走って坂ば降りて来た][<sub>C</sub>と]] に  
 ぶつかってしまわした。  
 (田中さんは子供が走って坂を降りて来たのにぶつかって  
 しまった。)

(11)において、意味的には、関係節の中にある名詞「論文」「人形」「子供」が主節の目的語や補語の役割を果たしている。また、構造的には、内在節が主節動詞から目的格や与格を付与されているように見える。これらの例においても、内在節の主要部に補文標識「と」が現れているので、問題の「の」が補文標識であり、内在節がCPである、という(10)での結論は支持されることとなる。

以上の分析をまとめると、次の通りである。

- (12) [<sub>内在節=CP</sub> [... NP ...] [<sub>C</sub>の／と]]

すなわち、標準語の主要部内在型関係節に生起する「の」は八代方言では「と」である。この方言において「と」が補文標識であるという前提に基づき、内在節はCPであると提案した。

### 3.2 内在節はNP?

では、もう1つの可能性、すなわち内在節がNPであるとする仮説についてはどうであろうか。この可能性を探る前に、第2節(9)で述べたことを再確認しておく、八代方言では名詞の「の」は「つ」である。したがって、もし

内在節がNPであるとする、その主要部に「つ」が可能であることになる。

次の例文は、前出の(10) (標準語(1))において「と」の代わりに「つ」を用いたものである。

- (13) a. \*太郎の [[りんごん皿ん上んあった] つ] ば食べらした。  
 b. 警官の [[泥棒のコンビニから逃げ出してきた] つ] ば逮捕さした。

しかしながら、(13) では明白な対比が生じている。(13a) は非文法的な文であるのに対して、(13b) は文法的な文である。つまり、「つ」は(13b)においてのみ可能であって、(13a) においては不可能であるという結果となった。

さらに、同様の対比が以下の例でも観察される。

- (14) a. \*(あたは) [[先生の論文ば書かした] つ] ばもう読んだか。  
 b. 田中さんな [[子供ん走って坂ば降りて来たつ] にぶつかってしまわした。

(14a) は(11a) に、また(14b) は(11c) に、「つ」をそれぞれ挿入した文である。前者は非文法的な文であるが、後者は文法的な文である。この文法性の違いは(13) と同じ結果である。

つまり、(13)、(14) のような場合、a-タイプの文は内在節の主要部に名詞が許されないが、他方、b-タイプの文はその位置に名詞が許されるということになる。すなわち、標準語では、b-タイプの文の「の」のみが名詞となることができる。このような対比は、a-タイプの文では、内在節はCPであるが、b-タイプの文では、それがCPとNPのいずれかであってもよいということを意味しているのであろうか。

### 3.3 トコロ節はNP

この問題を解決する上で重要となるのが次のような現象の存在である。

- (15) a. 警官が [[泥棒がコンビニから逃げ出してきた] の] を逮捕した。  
 b. 警官が [[泥棒がコンビニから逃げ出してきた] ところ] を逮捕した。

下線に示したように、(15b) は、(15a) (= (1b)) の内在節の「の」を「ところ」で置き換えた文である。解釈上は、両文とも「警官が逮捕した」のは「泥棒」であるが、より厳密に述べると、後者（以下、黒田（1999b）に従い、トコロ節）の文意はその逮捕の事態を伝えることにある。<sup>14,15</sup>

さらに、次のような例文でもトコロ節への置換えが可能である。

- (16) a. 田中さんは [[子供が走って坂を降りて来た] の] にぶつかってしまった。  
 b. 田中さんは [[子供が走って坂を降りて来た] ところ] にぶつかってしまった。

(16a) の「の」を「ところ」で置き換えると、(16b) となる。前に指摘した通り、解釈上に微妙な差異があるが、両文とも文法的である。

ところが、トコロ節への置換えがいつも可能であるとは限らない。例えば、前出の (1a) (= (17a)) においてはそれが不可能である。

- (17) a. 太郎が [[りんごが皿の上にあった] の] を食べた。  
 b.\*太郎が [[りんごが皿の上にあった] ところ] を食べた。

(17b) に示したように、内在節の「の」を「ところ」で置き換えた場合、非文法的な文になってしまう。つまり、この文では、トコロ節に直すことはできないという結果となった。

他の例文を考えてみても、同じ結果である。

- (18) a. (あなたは) [[先生が論文を書いた] の] をもう読みましたか。  
 b.\*(あなたは) [[先生が論文を書いた] ところ] をもう読みましたか。

(18b) が非文法的な文となってしまったことは、(18a) の場合も (17a) と同様に、内在節「の」の位置に「ところ」を挿入してトコロ節にすることができないことを確認するものである。

ここまで観察した点を八代方言の事実に照らし合わせてみると、興味深いパラダイムに気づく。まず、前節の (13) と (14) において、問題の「の」が八代方言において「つ」になる場合とそうならない場合とがあることを見た。八代方言におけるこの対比が、(15)～(18) において観察した、「の」をトコロ節

にできる場合とできない場合との対比と全く一致するという事に留意したい。すなわち、(19) に略説したように、「つ」が可能な文ではトコロ節が可能であるが、他方、「つ」が不可能な文ではトコロ節を用いることができない、という事実が明らかとなった。

- (19) a. [[... NP ...] の / \*つ / \*ところ] を食べた / 読んだ。  
 b. [[... NP ...] の / つ / ところ] を逮捕した / ぶつかった。

(19) の対比は、第一に、(19a) において「つ」が不可能であるので、a-タイプ文の「の」は補文標識であり、内在節は CP である、という前節の結論を支持するものである。第二に、(19b) において「つ」が可能であるので、b-タイプ文の「の」は名詞でありうるが、但し、この名詞の「の」は「ところ」を意味するものであることがわかる。<sup>16</sup>

したがって (19) に基づく結論は、(20) に図式化したように、内在節の主要部に現れる「の」を名詞 (N) と考える必要はなく、それは補文標識 (C) で、内在節は CP であるという結論 (12) を維持できることである。さらに、「の」が名詞 (N) である場合、構文は内在節のように見えるが、実際にはトコロ節であると分析できる。<sup>17</sup>

- (20) a. [<sub>内在節=CP</sub> [... NP ...] [<sub>C</sub> の (標準語) / と (八代方言)]]  
 b. [<sub>トコロ節=NP</sub> [... NP ...] [<sub>N</sub> の (標準語) / つ (八代方言)]]

前出の例に戻って補足すると、(1a) のような文は (20a) の構造を持つ内在節のみを取るのに対して、(1b) のような文は (20a) の構造を持つ内在節と (20b) の構造を持つトコロ節の可能性があるということになる。したがって、(20a) は黒田 (1992, 1999a) や坪本 (1991) が標準語の資料に基づき提案した CP 説と類似した結論であるが、他方、村杉 (1994, 1996) や星 (1995) などが主張する NP 説を支持しない結果となった。

#### 4. 付加詞説

最後に、以上の結論を踏まえて、主要部内在型関係節が項であるのか、それとも付加詞であるのか、という第二の問題点について検討してみよう。



#### 4.1 副詞節的解釈

内在節が副詞節的な解釈をされることは周知の事実である（特に、三原 1994、坪本 1991、1995 参照）<sup>18</sup>。例えば、前出の例文（1）はそれぞれ次のように解釈できる。

- (21) a. Taroo ate the apple as it was on the plate.  
 b. The policeman arrested a thief when he ran out from the store.

この点は八代方言においても同様で、例えば、八代方言の例文（11b）と（11c）の場合、翻訳すると、次のような副詞節的解釈が可能である。

- (22) a. Hanako put a dress on the doll as her grandmother made it for her.  
 b. Tanaka bumped into the child when she was running down the slope.

したがって、解釈上、内在節が付加詞であると考えてもおかしくない。

#### 4.2 付加詞として

村杉（1994, 1996）は、内在節が付加詞であるとする理由の1つとして、「の」に相当する再叙代名詞を文中で用いることができる点を挙げている<sup>19</sup>。例えば、次のような一対の例を考えてみよう。

- (23) a. \*(遊びに来た) 友達は [[机の上に置いてある] 写真<sub>i</sub>] を  
 それ<sub>i</sub> をじっとながめていた。  
 b. ?(遊びに来た) 友達は [[写真<sub>i</sub> が机の上に置いてある] の] を  
 それ<sub>i</sub> をじっとながめていた。

両文において、「写真」と同一指標を持つ再叙代名詞「それ」が主節の目的語の位置に生起している。外在節ではこのような再叙代名詞の使用は認められないために、(23a) は不適格な文となっている。ところが、内在節ではそれが認められるようで、(23b) は比較的容認できる文である。村杉（1996）の分析によれば、(23) に見られるような対比は、前者が二重目的語を取っているのに対して、後者は内在節が付加詞であるため、そのような違反は生じないと考えられることによって説明できるとする。

とすれば、八代方言ではどうであろうか。「つ」と「と」の区別に基づき、まず、次のような例から考えてみよう。

- (24) a.\*太郎の  $[_{NP} [pro_i \text{ 皿ん上んあった}] \text{ つ}]$  ばそれ<sub>i</sub>ば食わした。  
 (\*太郎は皿の上にあったのをそれを食べた。)
- b.?? 太郎の  $[_{CP} [りんご_i \text{ の皿ん上んあった}] \text{ と}]$  ばそれ<sub>i</sub>ば食わした。  
 (??太郎はりんご<sub>i</sub>が皿の上にあったのをそれ<sub>i</sub>を食べた。)

(24a) では、主節の目的語の位置に「の—関係節」と「それ」の2つの目的語が生じたような構造となったため、不適格な文となってしまった。一方、(24b) では、内在節の主語「りんご」に相当する「それ」が主節の目的語の位置に生じているにもかかわらず、許容度の高い文である。(24b) が非文ではないという結果は、内在節を付加詞として分析すれば、(24a) で起こったような二重目的語の違反は生じないことになるので、容易に説明できる。

さらに、PP が主節動詞の項として生成され、その中に「つ」と「と」が現れた例文を見てみよう。

- (25) a.\*あん人<sub>i</sub>は  $[_{NP} [pro_i \text{ シアトルで } pro_j \text{ 会わした}] \text{ つ}]$  から  
 そいつ<sub>j</sub>からワールドシリーズの切符ばもらわした。  
 (\*あの人はシアトルで会ったのからそいつからワールド  
 シリーズの切符をもらった。)
- b.?? あん人<sub>i</sub>は  $[_{CP} [pro_i \text{ シアトルでマリナーズの選手}_j \text{ に会わした}] \text{ と}]$   
 からそいつ<sub>j</sub>からワールドシリーズの切符ばもらわした。  
 (??あの人はシアトルでマリナーズの選手に会ったのからそいつ  
 からワールドシリーズの切符をもらった。)

構造的に説明すると、(25a) の場合、PP 内に「の—関係節」があり、「つ」が意味する人（例えば、マリナーズの選手）が「そいつ」として、別のPP「そいつから」を形成している。(25b) の場合、内在節に後置詞「から」が付与されていて、また主節のPPの位置には「そいつから」が生成されている。「そいつ」は内在節の目的語「マリナーズの選手」を意味する。(25a) は非文法的な文であるのに対して、(25b) は少々ぎこちないとはいえ、容認できる文である<sup>20</sup>。この文法性の違いについても、前の対比と同様に、内在節は付加詞であるという前提に立てば、次のように容易に説明することができる。(25a) は2つ

のPPを取っているため、非文法的な文であるが、他方、(25b)は「そいつから」が主節のPP項であり、内在節は付加詞であるから、構造上の問題はなく、文法的な文となる。

### 4.3 Pro

以上の考察の結果、日本語の内在節はCPで、付加詞であるという結論に至る。この結論に基づき、本論では、以下のように提案したい。

$$(26) \left[ \left[ \text{内在節} = \text{Adjunct CP} \left[ \dots \text{NP}_i \dots \right] \left[ \text{C} \text{ の} \right] \right] \left[ \dots \text{pro}_i \dots \text{V} \dots \right] \right]$$

前にも述べたように、(26)にあって、内在節をCPとする提案は、黒田(1992)や坪本(1991)<sup>21</sup>の主張に類似した仮説である。また、ゼロ代名詞proを想定するという考えは、村杉(1994, 1996)や星(1995)などの研究にも提示されている。<sup>22</sup> 補足すると、前出の(23)~(25)で見た、再叙代名詞の現象は(26)にあって主節の項の位置にあるproが「それ」「そいつ」として現れることもあると説明することができる。

## 5. おわりに

本稿では、日本語の主要部内在型関係節に関する研究にあって、考察の焦点となっている2つの問題点、第一に、「の」が名詞であるのか、あるいは補文標識であるのか、第二に、内在節が項であるのか、あるいは付加詞であるのか、について八代方言からの事実を考慮しながら検証した。分析の結果、問題の「の」は補文標識であり、したがって内在節はCPであるという結論に達した。また、再叙代名詞が許される点から、内在節は項ではなく、付加節であると分析した。最後に、主節にゼロ代名詞proを想定した構造(26)を提案した。

今回は紙面の制約上取り上げなかったが、今後の課題として、(26)にあって主節の動詞が項でなく、付加詞である内在節にどのようにして格をあたえるのかという疑問について解明する必要がある。この問題を検討する上で、黒田(1999a)の提案は貴重な方向性を示唆するものであることを終わりに記しておきたい。

本稿は、拙論“Two Types of Head-Internal Relative Clauses in Japanese: Some Dialectal Evidence” (ms. University of Shizuoka) を簡略化して日本語にてまとめたものである。本稿の一部は、筆者が第9回 Japanese/Korean Linguistics Conference (オハイオ州立大学、1999年7月31日) において発表したものである。草稿作成の途上、黒田成幸氏から有益なご批判と貴重なご助言をいただいた。ここに記して感謝したい。また、有益なコメントと励ましをいただいた傍士元氏に謝する。

## 注

- 1 英語では Head-Internal Relative Clause。また、「主名詞内在関係節」(金水 1994)、「主部内在関係節」(黒田 1998)。
- 2 (1) と区別するために、(2) ([皿の上にあるりんご]) は、通例、「主要部外在型関係節」(Head-External Relative Clause 以下、外在節) と呼ばれる。
- 3 これらの論文は黒田 (1992) に収められている。記述の便宜上、以下では 1992 年版に言及する。
- 4 黒田 (1999) は黒田 (1998) に加筆修正したものである。
- 5 紙面の制約上、これらの分析について詳細に言及することができないが、黒田 (1999) に詳細な検証が提示されているので、参照のこと。
- 6 本稿で取り上げる方言は、熊本県の八代地方で話されている方言である。
- 7 方言研究からシンタクスへアプローチする研究として、ベルファースト方言と英語の標準語を詳細に比較考察した Henry (1995) がある。また、日本語では、断片的な考察であるが、たとえば、斎藤 (1986) 村杉 (1991, 1993, 1998) 吉村 (1994, 2001) などがある。
- 8 標準語の格助詞と異なるものは、「の」が主格、「ば」が目的格である。ただし、「の」は子音で終わる単語に付与された場合、「ん」に音韻変化する。詳細については、吉村 (1994) を参照のこと。
- 9 「の一関係節」は黒田 (1999a) の「ノ一関係節」とは異なる。
- 10 括弧内の文は八代方言の標準語訳である。以下、同様の扱いとする。
- 11 分裂文に関する八代方言からの検証について、詳細は吉村 (2001) を参照のこと。
- 12 ちなみに、(6) の英語訳は ‘the fact that’ の構文を含むことになるであろう。
- 13 吉村 (2001) の (9) と (15)。
- 14 この点を初めて指摘したのは原田 (1973) の考察である。
- 15 トコロ節に関して詳細な議論を提供するのが本稿の目的ではない。黒田 (1999b) に詳細な統辞上・意味論上の分析が提案されているので、参照のこと。

- 16 したがって、 $[_{NP}$ の(標準語) / つ (八代方言)] = 「もの」・「こと」・「ところ」になるであろう。
- 17 しかしながら、三原(1994)は、「トコロ型内在節」と称し、トコロ節は内在節と同一の構造を取ると主張する。
- 18 三原では、主部内在関係節自体は複合名詞句であり、関係節に付与された格助詞が実際には後置詞であるために、副詞節になるという分析を提示している。
- 19 村杉の分析では、内在節は複合名詞句節で、本論の主張とは異なる。
- 20 村杉は、内在節はPPに生起しないと述べている。例えば、次のような文は村杉(1996)にとって非文法的(\*)な文である。
- (i) a. 警察は泥棒が店から出て来たのから盗んだ宝石を取り上げた。  
b. 警察は泥棒が店から出てきたのに逮捕状をみせた。
- しかしながら、筆者にはこれらの文は問題なく許容できる文である(黒田1999a)。
- 21 両者は主節の項の位置に pro を想定していない。
- 22 ただし、彼らの提案は複合名詞句説であり、本稿の主張とはこの点で異なる。

## 参考文献

- 黒田成幸(1998)「主部内在関係節」平野・中村(編)『言語の内在と外在』、1-79、東北大学文学部
- 黒田成幸(1999a)「主部内在関係節」黒田・中村(編)『ことばの核と周縁』、27-103、くろしお出版
- 黒田成幸(1999b)「トコロ節」黒田・中村(編)『ことばの核と周縁』、105-162、くろしお出版
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社
- 坪本篤朗(1991)「主要部内在型関係節」安井稔博士古希記念論文集編集委員会編『現代英語の歩み』開拓社
- 坪本篤朗(1995)「文連結と認知図式—いわゆる主要部内在型関係節とその解釈—」『日本語学』3月号、79-91
- 吉村紀子(1994)「『が』の問題」『変容する言語文化研究』、13-28、静岡県立大学
- 吉村紀子(2001)「分裂文を八代方言からさぐる」『ことばと文化』4号、67-84、静岡県立大学

- Harada Shin-Ichi. (1973) 'Couter Equi NP Deletion,' *Annual Bulletin*, Research Institute of Logopedics and Phoniatics, University of Tokyo, 7. 113-147. (福井直樹 (編) 『シンタクスと意味—原田真一言語学論文選集』 (2000)、181-215、大修館)
- Henry, Alison. (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*. Oxford University Press.
- Hoshi, Koji. (1995) *Structural and Interpretive Aspects of Head-Internal and Head-External Relative Clauses*, Doctoral dissertation, University of Rochester.
- Kuroda, S.-Y. (1974) 'Pivot-Independent Relativization in Japanese,' *Papers in Japanese Linguistics* 3, 59-93.
- Kuroda, S.-Y. (1975-76) 'Pivot-Independent Relativization in Japanese,' *Papers in Japanese Linguistics* 4, 85-95.
- Kuroda, S.-Y. (1976-77) 'Pivot-Independent Relativization in Japanese,' *Papers in Japanese Linguistics* 5, 157-179.
- Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Murasugi, Keiko. (1992) 'Two Notes on Head-Internal Relative Clauses,' 『金城大学論集 (英米文学編)』 第 34 号、233-242.
- Murasugi, Keiko. (1994) 'Head-Internal Relative Clauses as Adjunct Pure Complex NPs,' in *Syntactic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 425-437, Liber Press.
- Murasugi, Keiko. (1996) 'Head-Internal Relative Clauses and the Pro-Drop Parameter,' 『金城大学論集』 Vol.37, 327-350.
- Yoshimura, Noriko. (2002) 'Two Types of Head-Internal Relative Clauses in Japanese: Some Dialectal Evidence,' ms. University of Shizuoka.